

○直根人参の現品（浜田善利） Toshiyuki HAMADA: Fresh samples of *Panax* having a carrot-like root (Araliaceae) (Pl. II)

日本に自生している *Panax* 属植物の中に朝鮮人参に似た直根のものがあることが、江戸時代から知られていた。それは形状によってそれぞれ名称がついており、『古方薬品考』ではそれらが図示されている（本誌 62: 95, 1987）。

1989年7月、宮崎県の都城、小林、高原方面の薬用植物調査の折に心がけていたところ、地元の薬草を扱う人から『古方薬品考』所載の図にそっくりの人参を見せてもらい、標本を入手したので、現品の写真を添えて紹介する。本品は1989年7月、霧島山麓の宮崎県西諸県郡高原町で採集された野生のトチバニンジンであり、ふつうの根茎の竹参の中に混入していたものである。また生育中の植物は薬草を扱う人が、以前霧島山麓から採集して、自宅の庭に数株を植えてあるものである。

生植物については、果実について神田らが示した形態の特徴（本誌 61: 249, 1986）に合うものが認められた。またその栽植品の中には、山に自生しているトチバニンジンそのままの形状のものもみられた。

集められていた竹節人参は新鮮品で、入手したときは採取後水洗して乾燥はじめたばかりの状態であった。たとえば標本Dの細根はしなやかで、自由に曲げることができた。これらの直根人参は、かなり太めの根茎の竹参の中に混っていた。このことから、たいへんよく肥大生長したトチバニンジンの中で、このような直根人参は産出すると考えられる。

入手した標本は4個体で、乾燥後の計測値を表1に示す。

表 1. 直根人参の数値.

標本	相当する名称	長さ (mm)	最大径 (mm)	重さ (g)
A	直根人参	54.8	15.2	6.83
B	直根人参	54.5	16.8	6.28
C	多末様（加伊留古様）	32.5	21.8	3.52
D	多末様（加伊留古様）	23.2*	14.5	2.60

* 細根は長さ 83.6 mm.

江戸時代の直根人参は本来このようなものであるから、木島（1986）が説明した「戦前には“直根人参”と称し、トチバニンジンの竹節状根茎の老成部付近の鬚根の2~3本が異常に肥大し、径 5 mm から 7~8 mm、長さ約 3~5 cm 程の直根状になったものを採取したものがあった」というのは、これとは異なる別のものである。そして戦前にはそのような“直根人参”があったことになる。

なお今回は外部形態の観察だけに止めたが、次の機会には内部構造を検討してみたいと思う。

Explanation of Plate II

上段左：生育中の植物、上段右：その果実。

下段左：生品：左より A, B, C, D, 下段右：乾燥品：左より C, D, A, B。
生植物および直根人参の生品は、1989年7月24日撮影。

(熊本工業大学)

□ Gledhill, D.: **The names of plants, 2nd ed.** 202 pp. 1989. Cambridge Univ. Press. £8.95. 学名は、ある植物（分類群）を指す世界中の誰もが理解できる名前である。この本はその前半の 1/4 程を学名の成立の歴史と学名のつけ方を定めた国際植物命名規則の内容の紹介に当たる。後半を属名や種小名の解説に当てている。B6 版とコンパクトな本であるので命名規則の細部やすべての植物の学名の由来がわかるわけではないが、学名とはどういうものかを理解する上で有用と思われる。なお hard cover (£22.50) もある。

(三木栄二)

□ Blamey, M. & C. Grey-Wilson: **The illustrated flora of Britain and Northern Europe** 544pp. 1989. Hodder & Stoughton, London. £25. 自然史の根強い伝統に支えられた英国や西ヨーロッパ諸国には、要求のレベルに応じた様々な図鑑や写真集が出版されている。数年前に英國の田舎の家々を訪問した際にどの家にも一冊はこうした図鑑があった。持っている図鑑によって植物への関心の程度もある程度わかるときいた。ここに紹介する図鑑は漸新なものである。全種の全形図はないが、属または種群毎に 1 種の地上部の全形図が描かれた図版のほかに、解説の欄外に種の区別点となるような重要な特徴が図示されている。ちなみに図は全部彩色されている。各種の記述は、簡にして要を得たものである。やゝ詳しい解説、科への検索表、ナデシコ科、キンポウゲ科、キク科など 9 科では属への検索表も用意されている。解説その他の執筆は Kew Magazine の編者でもある Kew の Grey-Wilson による。図版はセイロン生れの Marjorie Blamey による。70 歳を超えた彼女ははじめ写真家として英国でデビュー後、映画や舞台俳優などを経て、第二次世界大戦後から植物画家に転じた。本書の植物画にたいして 1989 年に英王国立園芸協会から金賞が贈られ、原画は最終的には Kew 植物園に所蔵されることになっている。なお、本図鑑からはシダ植物、イネ科、カヤツリグサ科の植物は除かれていることを附記しておく。

(大場秀章)